ふるさと歴史民俗散歩

第18回

「長話は庚申の夜に」

宇都宮伝統文化連絡協議会顧問　柏村　祐司

前回、女性の信仰として十九夜信仰を紹介したが、今回は男性の信仰である庚申信仰を紹介したい。庚申信仰は、中国からもたらされたものである。道教に、「人間の体内に三尸（さんし）という虫がおり、庚申の晩に人が寝ると体内から抜け出して天帝にその人の罪過を告げ、そのために人間は天帝から罰を受ける。そこで罰を受けないために庚申の晩は身を慎んで徹夜をしなければならない」との教えがある。

わが国では平安時代に公家の間に庚申待（こうしんまち）として庚申信仰が広まった。その後、武士階級にも取り入れられ、江戸時代には庶民の間でも庚申信仰が盛んとなり、各地に庚申講が組織され、庚申塔が建てられるようになった。

庚申講のお日待ち

栃木県では、足利市と日光市旧日光が庚申信仰の盛んな地域である。特に旧日光市は、古くから庚申信仰が盛んで、寛永年間（一六二四～四三）のものを初め江戸時代初期造立の庚申塔が見られる。宇都宮市の場合、庚申塔の造立から見る限り十八世紀後半から盛んとなり、最盛期は文化文政期頃から昭和初期頃である。

庚申講は、大字や坪単位に組織された。その講中が造立した供養塔が庚申塔である。宇都宮市内の庚申塔には、河原石や切り石を素材とし、表面に「庚申塔」とか「庚申供養塔」、「青面金剛供養塔」、「猿田彦大神」等と文字を刻んだもの、および「青面金剛像（しょうめんこんごう）」を浮彫にしたもの等が見られる。多くは「庚申塔」「庚申供養塔」等の文字碑であり、宇都宮の庚申塔の特色である。「青面金剛像」の浮彫は数少なく、河内地区下田原町上組の享和三（一八〇三）年の庚申塔は、典型的な青面金剛像を施した庚申塔である。

庚申講の集まりは、六十日ごとにめぐって来る庚申の日の晩に開催される。宿は各家回り番制で、座敷の床の間に庚申講の掛け軸を下げ、その前にご馳走を供え灯明を灯す。男たちが集まり、拝礼し、その後飲食・歓談となり、翌朝解散となる。ともあれ庚申の晩は、家に帰らず宿で寝ずに過ごすものだといわれ、「庚申様の日に出来た子は盗人になる」とか、「長話は庚申の夜に」等の言い伝えがある。話題は、庚申様を作神とするところから農作業のことや村の簡単な決め事等が多かった。これが一般的な庚申講の様子であるが、地区により多少異なる。雀宮地区東谷町のある講中では、念仏を唱え、「食い庚申」と称してウドンを打って食べたという。同じ東谷町の北新田の講中では、ケンチン汁、ガンモドキ、キンピラ牛蒡、ホウレン草のオヒタシ等の御馳走を酒を飲みながら食べたという。

下田原上組の青面金剛像

江戸中期頃から盛んであった宇都宮市内の庚申信仰ではあるが、昭和三十年代以降衰退した。それでも上欠町初網坪のように、年二回飲食店を会場に、十九夜講と庚申講を兼ねて男女が集まり飲食歓談を行っている所もある。

十九夜信仰も庚申講も、暮らしに根付いた風習は、簡単には捨てきれない。また、人々の絆を求める意識もおいそれとは無くすことはできない。野辺にたたずむ十九夜塔や庚申塔は、名のある仏師の彫刻に比べると芸術性は劣るが、かつての地域住民の信仰、暮らしぶりを今に伝える証である。